



風神御

敗戰者 圖鑑

無印





敗者 無印 國鑑



























みなさん、こんにちは。亭風酒寺御です。

この度は《敗戦者図鑑》をお買い上げいただきありがとうございます！

今回は「敗戦者」をテーマにしてポ○モン同人誌を描いてみました。

まだ小さいとき見たポ○ットモンスター無印で、

ナツメは負けたサトシたちを人形にして弄ぶ、というシーンが強く印象に残って、

教科書のように筆者を啓蒙しました。

バトルで負けたら小さくされ、おもちゃとして扱われるのは、

最高の結果ではないですか！

(残念ながらあとのポ○モンシリーズではそういうポロリはなくなりました。)

毎回主人公たちが女性トレーナーに挑んだら、

つい昔見たシーンを思い出し、妄想してしまいます。

この妄想のもとで、今回の同人誌が生まれました。

本作はポケスペとゲームに基づいて世界観を作り上げました。

もちろんアニメや他の二次創作

も参考して、さらに個人的な妄想を加えて脳内補完したものですから、

あまり細かいところを気にしないでいいと思いますw

今のは第一作目です。

今後は続編をどんどん発表しますので、どうぞご期待ください！

亭風酒寺御



ムサシ：「ふーん、もう動けないのかじやりボーイ？かわいいそうに〜」

不思議の力でサトシを小さくした後、

ムサシは自分が一日中働いて蒸れた足をブーツから出して、うんとサトシを踏んでしまった。

足汗をかいて黒パンストからあふれた臭いで、サトシの呼吸は重くなってきた。

サトシ：「はやく放せ！あ…ほら、地面を踏んだせいでストッキングに穴が空いてしまったぞ。」

ムサシ：「え、ちがうよ。あたしぜんぜん着替えてないからよ。」

ロケット団の給料が安すぎるんで、新しいパンストでも買えないわー！

ムサシはブツブツ文句を言いながら、

サトシをおもちやみたいに、もっと力を入れてこすり始めた。

ムサシ：「こら、顔をこっちに向けて舐めてみる。」

あたしの足をきれいにしたら、あなたのピカチュウを奪わなくてもいいのよ。」

サトシ：「!?!？」

体に踏んでる大足がすごく汚くて臭いけど、

自分の友達ピカチュウのために、サトシはその屈辱に堪え、舌を出した。

ナツメ：「…あたしと遊ぶのを約束したのに、逃げるのはダメ。」

ポケモンバトルで負けたサトシは弁解する機会もなく、
ナツメに虫のサイズにされた。

サトシ：「ま…また小さくなつた。く…体をコントロールできない！」

巨大なるナツメでシヨックを受け、
また強力なサイコキネシスの一撃を喰らつたサトシは、
無意識的にナツメの足指をキスした。

ナツメ：「や…そこまで変態とは！もう救いのない方だね。
前わたしに負けたブルーのほうがあなたより強い。

彼女のおもちやにさせてもらうわ。」

軽蔑の目で見下ろしているナツメは、人形のブルーを取り出した。

ブルー：「そんな変態だつたなんて想像もつかないのよ！」

サトシ：「ま…待って。違つー！」

サトシの説明を待たず、ブルーは素足を伸ばしていった。

サトシは慌ててナツメのストッキングを這い上がったが、ふとナツメの股間の
隙間に滑り込んだ。

薄い黒ストッキングだけ被っているアソコエデンに挟まれ、

サトシは二人の少女に思う存分弄ばれた。



ナツメはテレポートで服脱いで、何も隠そうとしなくその桃色の性器を晒す。少女特有の香りがするムレムレまんこを思いっきり自分の指で広げ、超能力でダークホールを作ってサトシを吸い込むようとする。

サトシ：「ナツメさん！やめて！これ以上だと、

ガマンできなくなるから：ぐ：もうダメく」

ナツメ：「ふん、変態蟻さんがようやく本性を現したか？」

ブルー：「やっぱり変態こむしだわ！中で待ってもらおうわ。永遠に！」

サトシのイメージが完全に崩れ、怒ってるブルーに蹴られてナツメの蜜壺に吸い込まれた。

ナツメ：「や、入ったら再チャレンジできないよね。

彼をつかみ出したら、ジム戦をあなたの勝ちにしても良いのよ。」

ブルー：「げ：気持ち悪い！」

嫌がっていて、ブルーは足をナツメのまんこに入れてサトシを引き上げようとする。ブルーの足の臭いと柔らかい膣壁で正気を失ったサトシは、自分の本能に従って楽しみ始めた。

もう全然主人公に見えないくらい、完全な性玩具になってしまった。

エリカ：「これであなたの負けですの〜身の程を知らない敗者よ、わたくしのおもちやになってもらいますわ」

再びジム戦で負けて小さくされたサトシはその雷の音みたいな声で動揺している。黒髪ボブで和服を着用する巨大な少女は、土で汚れた足袋を彼に伸ばした。

サトシと一緒にジムを挑戦したシゲルはうっかり巨大な足指に挟んで持ち上げられた。シゲル：「放せ、この面倒くさい女！」

大声で叫んでるシゲルは自分の体にかけて力がどんどん強くなることを察知したが、まったく動けない。

それに、たくさん汗をかいた足の臭いが足袋についている土と花の香りが絶妙に混じっていて、不思議な異臭になった。

エリカ：「頑張つて堪えてください。これはね、たくさんのおねむりごな、しびれごな、どくのごなとあまいかおりの入った足袋です。

草タイプのポケモンバトルの大百科と呼んでも良いですわ。」

サトシ：「なにこの臭い…また頭が…！」

エリカの足の臭いを嗅いだら、サトシは惑ってしまったって、逃げ足まで遅くなった。

エリカ：「やれやれ、みなさんが言った通り、やはりサトシさんはエロスケベ蟻さんですわ！

せっかくこんな面白いおもちゃに出会いましたから、こちらのこどもたちも参加させてもらいますわ！」

サトシ：「そ…そんな」

まもなく巨大なる少女とポケモンたちにおもちやにされるサトシは、絶望に包まれ奈落の底に落ちていく。

アンズ：「これであたいの勝ちね？では約束通り、試練を与えよう。」

忍法《毒の陣》！

チャレンジャーゴールドとシルバーを打ち倒して、アンズは忍術を発動した。

ゴールド：「周りことが大きくなった。ありえん！？」

シルバー：「きつと奴が忍術で作った幻覚だ。惑わされるな！」

体が小さくなった少年たちは大声で叫んでも、アンズにとっては蚊の鳴き声に過ぎない。

アンズ：「ほほっ幻覚だと思ってるか。じゃこの匂いを嗅がせてもらおうぞ！」

人形のサイズになったチャレンジャーたちに、

アンズはゆっくりと熱くて臭い足袋を伸ばした。

強烈で刺激的な臭いがただ一瞬で広がって行って、

その激臭に堪えない少年たちは鼻を覆って地面でゴロゴロしている。

ゴールド：「うあ！もう我慢できん！こんな人をいじめる忍術があるなんて！」

だんだん近づいてきたアンズのムレ足を見て、

ゴールドはうろたえて逃げ出した。

シルバー：「た：助けて！」

後ろからきた仲間の悲鳴を意識したゴールドは振り返って見ると、シルバーがアングスの汚い足袋に挟まれたことを目撃した。

ゴールド：「くそ、シルバーを放せ！」

アングスの何日も洗ってない足袋に対して、

ゴールドは素手でその大足を抵抗し、無力な拳で足の底を攻撃してみた。足を搔く程度でもならないゴールドの攻撃を受け、

アングスはただ徐々に足裏を合わせただけで、ゴールドがどく状態になった。

巨人少女の足の臭いに我慢できないゴールドは

急に自分がまだ小さくなっていくことが分かった。

アングス：「どうした？これが我が家の秘伝術『どくびし特訓』だよ！

お前たちを鍛えるため、あたいは数日も足を洗ってないよ。」

足袋の隙間から入ってきた少女の声でゴールドはふらふらしている。

やっと、アングスの足裏は完全に合わせた。
小さな少年たちは蒸れた足袋に閉じこまれ、
今彼らの体はまさに蟻より少しだけ大きい。
アングスが知らない間に足指を回すと、少年たちは完全に覆われる。

ゴールド：「く……くそ！もうちよつとだけ、俺たちは必ず逃げるんだ！」

数日も足を洗ってない少女の汚い足袋に弄ばれ、もはや屈辱の極み。
それでも屈服しないゴールドとシルバーは必死に足袋の隙間から逃げ出して、
荒い息で呼吸している。
だとしても、アングスの足のムレ臭いしか吸えない。

特訓という名のいじめを我慢して、
シルバーは堪えなくアングスの臭い足指に倒れた。

アングス：「もう失敗か？お前たちは素質を持っていると思っただけど、
まだまだ足りないね！よし、このあたいがお前たちの毒耐性をあげよう！
こうみたいに、お前たちを足で挟んで擦って……！」

ゴールド：「も、もう嫌だ！」

少年たちは死角のない足指に覆われ、足の臭いを吸わせる。

ゴールド：「来ないで！うあああ……！」
敗戦で小さくされないなら、ゴールドは女の子の家に行っても、おっぱいに襲われても喜んでいけるけど、実際に巨乳に挟まれると、動けないゴールドはどうしても巨乳が好きになれなくなった。香水の香りと汗に混じって変な匂いでゴールドの絞られた肺は我慢の限界になった。

ゴールド：「は、放せ！コホン……」
アカネ：「うちは好意であんたたちに『ころがる』の対応方法を教えとるんやけど。特訓せんなら、うちのミルタンクと遊んでもらうでー」

ゴールドが気づいたら、もう自分の仲間がミルタンクのポケモンボールに閉じこまれた。それにしてもミルタンクはシルバーの2倍ほど大きいから、シルバーは人形みたいに抱きしめられ、ゴールドと同じく胸に挟まれた。

乳首で口を塞いだせいで助けの声を出せないシルバーはしかたなく、必死にモーモーミルクを飲み込んでいる。

ゴールドが挟まれている同時に、興奮で充血した少女の胸はだんだん立ってきた。

敏感過ぎて簡単に昇天させ、アカネの顔が赤くなっている。

アカネ：「は……はあく思わず気持ちよくなってきた……ミルタンクみたいに授乳させてもらうな！」

そしてアカネはゴールドを適当に自分の胸に押しあたっている同時に、白濁汁が流れてきた。

——この状況になるのを誰も教えてないよ！

葉っぱの下に隠れているゴールドは必死に自分の息を止める。虫の捕食から逃げるため、ゴールドは今雑草の下に隠れている。シルバーと一緒にジム戦で敗北したあと、体が急に小さくなっていて、

巨大なジムリーダーツクシを見て、二人は一瞬で同じ行動をとった。

もちろん逃げ走った。だとしても、彼らはぜんぜん今の状況を理解してない。

今の彼らはすぐ小さくて、こむし以下の存在とでも言える。

いつむしタイプのポケモンに踏みつぶされてもおかしくない。

言い換えれば、今の彼らの方こそこむしだ。

ツクシ：「この全てが、あなたたちをむしの生活を慣れさせるためだから。

むしのことをもっと詳しく知らないとぼくに勝てないよ。」

キャンプ服装を着ているきれいな少女（？）はシルバーを手持ちの虫箱に入れといた。

シルバー：「どこがむしのことを知るためなんだよ……はやくこっから出せ！」

完全に自分好みで飾られた虫箱の中に、

湿っぽい土の匂いがしてシルバーを窒息させていく。

またツクシが歩き回っているせいで、

シルバーはしっかりと立つことさえできないから、逃げ出せないのは言うまでもない。

少年はいくら壁をたたいても、箱は丈夫でなんの揺るぎもない。

小さくなり過ぎた少年には、むしろ外のむしタイプのポケモンの方がこわい。

透明なガラスに隔てられているが、

外で待っているビークインが人みたいに貪欲な視線でシルバーを見つめている。

この体形でビークインにおもちゃにされたら、絶対抵抗できずに何回も吸い取られるだろう。

よだれを垂らしているヘラクロスに食べられるよりはマシだけど……

ツクシ：「一人だとちよつと寂しいよね。すぐにゴールドをあなたのお供をさせるから。」

そう言ってるツクシの顔に笑みを浮かべた。

ゴールドは息を抑えて雑草の下に隠れているが、巨大な手はもう彼をつかむようとすることを知らない。



ルビー：「おお！？なんて巨大な生物。女神のように美しい！」
最初サファイヤに出会うとき、

ルビーはまだ彼女は怪獣レベルの新種ポケモンだと判断したが、
相手が少女である事実を確認したら、
こむしのようなルビーにとって、

野生のサファイヤはまさに荒野の女神の魅力が溢れている。

けれど、サファイヤにとって、ルビーは変なこむしに過ぎない。

サファイヤ：「素早いやつ！おい、逃げないで！」

タンパク質を補充するため、

巨大なる野生の少女はルビーを追い始めた。

小さな少年はサファイヤの美しさを褒めながら、
自分の命のためあちこち隠れている。

彼はばれるリスクを冒して少女の尻の下から通り抜け、
うまくサファイヤの足のそばに到達した。

それが荒野で歩ていた、

文明から解放され自然に戻った少女の素足で、

底が泥まみれになっている。

その原始の美しさに惑わされ、ルビーは思わず手で触った。
当然、即ばれてしまった。

サファイヤ：「ん？足が誰かに触られている感覚が…
そこにいるのか！？」

ルビー：「こっちから見ると、本当に魅力的な風景だな！」

前には巨人少女の足指以外、

山のように視線を遮る完璧な曲線美をもった美尻もルビーの目に入った。

体はいくつかの葉っぱだけで被られ、

サファイヤの素尻している姿は完全にルビーに晒した。

ふと少女の肛門が動いた。

ルビーが事情を察した前に、

サファイヤの体から強くてぽかぽかした気流を吹き出してくる。

プーーーーー！！！！

サファイヤのおならの直撃を喰らったルビーはひっくり返された。

ルビーは転んでいて、強烈な毒ガスアタックを受け続ける。

狭い洞窟にはなかなか臭いが散れないまま沈んでいる。

こむしのようなルビーだと、

どうしてもこの悪臭地獄から脱出できない。

サファイヤ：「なんだ？」

この変態こむし！しっかりとお仕置きする必要があるみたいだね」

少女は巨大な手をルビーに伸ばしていく。

少年にとって、この一生でもっとも奇妙な境遇は、

まだまだ始まったばかりだ。



ルビーはかなり素早く動いてるけど、野生の少女の鋭い勘に敵わない。小さな少年は大きな指で握られ、空中で回されている。

もはや平等で対戦する資格はない。二人の差はそこまで大きい。

サファイヤ：「あっはく！タンパク質豊富な体しているね！」

累卵の危うきにあるが、逆に少年はその野性的な力に夢中になった。

ルビー：「なんと美しい…そんな美人が世におるとは！」

もっと近づいてもいいか？」

サファイヤ：「ふん、こむしの分際で生意気な！食べてやる！」

サファイヤはルビーをもっと高くあげ、

舌を出して少年を口の中に入れようとする。

だがこの挙動を見て少年の胸は高鳴ってくる。

ルビー：「い…い…い…一つになる！」

ルビーを食べようとするサファイヤは、その言葉を聞いたら、ルビーを地面に捨てた。

サファイヤ：「人の言葉を喋れるこむしか。

そのまま食べたなら気持ち悪くなりそうから、しっかりとわたしを奉仕するが良い。」

泥まみれの素足はルビーに近づき、器用な足指使いで少年を持ち上げた。

思春期で足の臭いが特に強くなって、ルビーの嗅覚を侵食していく。

だが執念深い少年はまだ諦めず、

逆に興奮してきて自分からサファイヤの汚い足指を舐める。

ルビー：「はあ…いい！素朴で自然なものは最高く！」

サファイヤ：「ほーそんなにわたしの足が好きなのか？いい味しているね！」

巨大な少女は膝を曲げて自分の足をつかんで近距離でその臭いを嗅いでみる。なんでそのこむしがそこまで夢中になるか気になる。

まあ、それならこの泥まみれの両足のクリーニングを

やつにさせてもらおう。

ルビーは半日もかかってサファイヤの足指を一本ずつ、隅っこまできれいに舐めた。舌を出して、のどがもつと渴いてくる。

それに加えて、全身が泥まみれになった。

疲れて横になっているルビーを見つめ、

サファイヤは立ってきて股間を小さな少年に向けてしゃがんでいく。

サファイヤ：「よくやったなこむし。それでは水を飲ませるね。

ついでにシャワーも浴びさせるわ。」

アソコを遮る葉っぱを取り、サファイヤは指で自分の尿道口を広げる。

ルビー：「ま…まさか！？感謝感激雨あられ！」

あそこの絶美な風景で元気を奮い起こしてきて、両腕を広げて迎える。

ようやく黄色い大洪水が降ってきた。

暖かくて匂いがして、滝のようにルビーの体に落ちてくる。

小さな少年は必死に大洪水からの衝撃を堪え、この心地よいシャワーを楽しんでいる。

サファイヤ：「はっはっはく！これでわたしの匂いがあなたの体に残した。

これからあなたはわたしのものだよ。」

自分の小便に吞まれている少年を見下ろして、

野生の巨人少女は堪えられず笑ってしまう。そして、二人で幸せな生活を始めた。

敗戰者 圖鑑

無印

寶可夢